

実践研究

幼児の運動意欲を高める運動遊びに関する考察
Study of Exercising Play Which Enhances the Motivation
of Infants for Exercise

村上 咲子¹⁾
Murakami Sakiko¹⁾

筒井 茂喜²⁾
Tsutsui Shigeki²⁾

キーワード 幼児, 運動意欲, 運動遊び, 肯定的承認, 非言語メッセージ

1 はじめに

1.1 問題の所在

幼児は、運動遊びを通して、多様な動きを獲得し、自分の体をコントロールする力を身につけていくとされる(文部科学省, 2013 佐々木, 2014)。また、自分の体をコントロールする力を高めることは、児童期以降の運動技能の習得をスムーズにする(杉原, 2014)。

しかし、近年、すぐに転ぶ・走るフォームがぎこちない・全身をバランスよく使って跳んだりボールを投げたりすることができないなど、自分の体をうまくコントロールできない幼児が増えており、問題視されている(佐々木, 2005; 智原, 2011; 浅見ら, 2015)。この背景には、幼児の生活の中から、いわゆる三間(遊び時間, 遊び仲間, 遊び空間)が失われつつあることで、幼児が運動遊びに興じる機会が減少し、多様な動きを習得できない状況があると指摘されている(中村, 2004; 仙田, 2009)。また、これに加え、近年、運動遊び自体を好まない幼児や運動遊びに対する意欲(以下、運動意欲)の低い幼児の存在も報告されている(野田, 2010; 酒井, 2007)。

マイネル(1981)が「就学前の子どもは強い運動衝動や活動衝動を特徴としている」と述べているように、幼児は元来、体を動かすこ

とが好きであり(広瀬, 2005; 坂原, 2006)、運動遊びにおけるこのような幼児の実態は看過できない問題である。

そこで、幼稚園、保育園では、独自に運動指導プログラムを組み、実施しているところが増えている。しかし、森ら(2011)は、運動指導プログラムを実施している園と実施していない園における園児の運動能力を比較したところ、実施していない園の方が有意に高かったことを報告し、この要因として運動指導は往々にして大人の技術を一方的に指導する傾向があり、その結果、他者との比較を子どもに求め、子どもの運動意欲の低下を招いている可能性があるとする。一方、杉原ら(2004)は、運動遊びの頻度が高い子どもは運動能力が高いことを報告するとともに、幼児期の子どもは一方的に教え込む運動指導よりも自ら意欲的に取り組めるような運動経験が必要であるとし、運動意欲を喚起させることの重要性を指摘している。

小山ら(2014)は「安心を得た幼児は新たな事柄へチャレンジしたいという欲求をもつ」と述べ、広岡(2013)は「自分を受け容れてくれる人がいるという“安心感”は、子供にとって非常に大きな力となる」としている。また、鯨岡ら(2001)は「“安心感”を抱けずに心理

1) 大鰐小学校
2) 兵庫教育大学

Owani Elementary School
Hyogo University of Teacher Education

的に不安定になると、子どもはたちまち元気をなくし、(中略：著者ら)園で活発に遊べなくなる」としている。すなわち、幼児はまわりの人に対して「安心感」をもつことで、運動意欲が喚起すると考えられる。

しかし、近年、共働き家庭が増え、保護者がわが子に関わる時間が減ってきている(ベネッセ, 2015)。また、幼児と体を動かす遊びをしている母親は一割強という報告(厚生労働省, 2007)もある。すなわち、幼児が最も安心感を抱く対象である保護者との関わり減り、一人で過ごすことが多い幼児が増えているのではないであろうか。このような家庭状況、社会状況の変化が幼児から「安心感」という心の居場所を奪っているのかもしれない。

現在の幼児が、運動遊びに自ら意欲的に取り組むには、まずは「周囲の大人から受け止められ、認められている」という「安心感」を抱かせる必要があるのではないだろうか。岡澤(2004, 2005)は、保育者が励ましたり認めたりする言葉がけを行うことにより幼児の「安心感」が高まり、運動意欲が向上したことを報告している。しかしながら、幼児に「安心感」を与えるものは言葉がけだけではないであろう。例えば、泣いている子どもが母親に抱きしめられるとずっと泣きやむ姿はよく見かける光景である。また、幼児が何かに挑戦するとき、何度も保育者の方を振り返り、保育者の視線が自分に向いていることを確認してから挑戦する姿も日常的に見かけることである。このような幼児の姿からもわかるように、言葉がけの他にも幼児に「安心感」を与え、運動意欲を喚起させる効果的な手立てがあるのではないかと考える。

1.2 目的

そこで、本稿は、幼児の運動意欲を高めるために、幼児に「安心感」を与える手立てを考察することを目的とする。

この目的を果たすために、本稿では次のように考察を進める。まず、幼児の運動意欲について論じる先行研究を参照することで幼児

の運動意欲の内実を明示する。次に、「安心感」について考察し、幼児が「安心感」を得るとはどういうことなのかを論じる。そして、最後に、「安心感」を幼児に与える手立てについて考察する。

2 運動意欲の検討

2.1 先行研究から導出した運動意欲を構成する因子について

1985年から2016年までに発表・発刊された先行研究を対象に、国立国会図書館および論文データベース「Google Scholar」「CiNii」「J-STAGE」にあたり、「幼児」「意欲」「運動」「遊び」をキーワードにした教育的研究、またはそれに類似する研究論文および書籍を収集した。その結果、54件の論文と10冊の書籍が収集された。なお、これらの一部を資料1に示す。

収集した64件の先行研究を整理した結果、導出された運動意欲に関する因子は、表1に示すように「有能感」に関するもの、「受容感」に関するもの、「欲求」に関するものと大きく三つに分けられた。

表1 先行研究から導出された運動意欲に関する因子

導出された因子	意味	著者名	
「有能感」に関するもの	運動面の有能感	ブランコをこげるか、ジャングルジムに登るのが上手かなど運動遊び場面における有能感	桜井ら(1985)
	運動場面での有能感	運動遊びに關しての有能感	濱島ら(1993)
	運動遊びの有能感	運動遊びに關しての有能感	鈴木ら(1996)
	運動の有能感	運動遊びに關しての有能感	岡澤(1996)
	運動に関する有能感	運動経験に関する有能感	森ら(1996)
	運動有能感	なわとび、かけこ、鉄棒などの運動に關しての有能感	森ら(2006)
「受容感」に関するもの	運動の受容感	運動遊び場面における他者からの励ましや褒めに関する受容感	岡澤(1996)
	受容感	運動会における他者からの励ましや褒めに関する受容感	小田ら(2007)
「欲求」に関するもの	身体活動欲求	動的遊びをやりたいという欲求	岩崎ら(1989)
	運動遊び欲求	活動的な遊びをやりたいという欲求	水野ら(1996)

導出された因子の中で「有能感」に関するものは、桜井ら(1985)の「運動面の有能感」、濱島ら(1993)の「運動場面での有能感」、鈴

木ら(1996)の「運動遊びの有能感」、岡澤(1996)の「運動の有能感」、森ら(1996)の「運動に関する有能感」、森ら(2006)の「運動有能感」の六つであった。桜井らは「運動面の有能感」の測定項目として「ブランコをこげるか」「ジャングルジムに登るのが上手か」などを挙げていることから、桜井らは「運動面の有能感」を運動遊びにおける有能感として捉えていると考えられる。濱島らの「運動場面での有能感」、鈴木らの「運動遊びの有能感」、岡澤の「運動の有能感」は測定項目として「ボールを上手に投げられるか」「鉄棒が上手にできるか」など運動遊びが上手にできるかどうかの内容を挙げている。このことから、濱島らの「運動場面での有能感」、鈴木らの「運動遊びの有能感」、岡澤の「運動の有能感」は、桜井らと同様に運動遊びにおける有能感と捉えていると解釈される。また、森ら(1996)は、「運動の有能感」について具体的な内容を示していないが、桜井ら(1985)の「運動面の有能感」に基づいていること、幼児の運動経験の内容を取り上げたとしていることから、森らも「運動の有能感」を桜井らと同様に運動遊びにおける有能感と捉えていると考えられる。

以上、導出されたこれらの六つの因子は、いずれも運動遊びにおける有能感であり、同じ意味の言葉として使われていると考えられる。そもそも、「有能感」とは、自分は「できる」「やれる」と感じることであり、杉原ら(2014)は「自分への信頼感」、岡澤(1998)は「自分はできるんだという自信」と述べている。杉原らの述べる「自分への信頼感」とは、自分は「できる」という自分への自信であり、岡澤と同じ意味で使われているといえるだろう。このことから、著者らは「有能感」を「自分はできるという自信」と捉え、導出された六つの因子を、「運動遊びにおいて自分は運動ができるという自信」と解釈し、本稿では「運動有能感」とし、幼児の運動意欲を構成する一因子と捉える。

また、導出された因子の中で「受容感」に関するものは、岡澤(1996)の「運動の受容感」と小田ら(2007)の「受容感」の二つで

あった。岡澤は「運動の受容感」の測定項目として、運動遊び場面において他者が「がんばれといってくれる」「ほめてくれる」などを挙げていることから、運動遊びの場面で他者から励まされたり認められたりすることを「運動の受容感」として捉えていると考えられる。また、小田らは「受容感」とは「周りの人が“見てくれている”“ほめてくれる”というように受け止められているということを認知すること」と述べている。小田らの「みている」「ほめてくれる」というのは、他者から認められているということであり、岡澤と同様の内容を「受容感」として捉えていると考えられる。

以上のことから、「受容感」に関する二つの因子を、「運動遊びにおいて他者から励まされたり認められたりしていること」と解釈し、本稿では「受容感」というそのままの文言を用い、幼児の運動意欲を構成する一因子と捉えることとする。

また、導出された因子で「欲求」に関するものは、岩崎ら(1989)の「身体活動欲求」と水野ら(1996)の「運動遊び欲求」の二つであった。岩崎らは「身体活動欲求」を運動する時の「身体を動かしたい」「身体を使って何かを実現したい」という欲求であると捉えている。水野らは「運動遊び欲求」を「活動的な遊びをやりたい」という欲求であるとしている。このことから、どちらも運動遊び場面において「身体を使って動いて遊びたい」という欲求であると捉えることができる。

これらのことから、「欲求」に関する二つの因子を、「体を動かして遊びたいと思う欲求」と解釈し、本稿では身体を動かしたいという欲求であることを強調するために「身体活動欲求」とし、運動意欲を構成する一因子として考える。

2.2 運動意欲の構造

前項で、著者らが幼児の運動意欲の因子として捉えた「運動有能感」「受容感」「身体活動欲求」の三つの因子の関連はどうなっているのだろうか。そこで、本項では、「運動有

能感」と「受容感」の関係、「身体活動欲求」と「受容感」の関係、「運動有能感」と「身体活動欲求」の関係について論じることとする。

自分の能力を認知する力が未熟である幼児は、楽しく運動遊びをしたときに、他者から「がんばったね」「よくやったね」などと認められたりほめられたりすること、つまり受容されることにより「運動有能感」を形成していくとされている（杉原ら，2014）。同様に、小田ら（2007）は「幼児期においては受容感を高めることが運動有能感を育て、運動に自発的に関わろうとする態度を養うことにつながる」と述べている。このことから、幼児は他者からの「受容感」を基に「運動有能感」を高めていくと推察される。言い換えると、「運動有能感」は「受容感」を基盤に高まっていくと考えられる。

また、「身体活動欲求」は幼児が生まれつきもっている欲求であり、幼児は生来的に「動きたい」「体を動かしたい」と思っている（永島，1986）。しかし、動くためには安心感や心の安定が必要であり、何かあっても受け止めてもらえると感じることが重要であるという（初塚，2010）。文部科学省（2008a）が「幼児は周囲の大人から受け止められ、見守られているという安心感を得ると、活動への意欲が高まると述べているように、幼児の「身体活動欲求」の基盤にも「受容感」があるといえるだろう。

それでは、「運動有能感」と「身体活動欲求」との関係はどうであろうか。幼児は低年齢のうち、自分のことを客観的に判断できないため、自分を有能だと思っているとされている（浅見ら，2015）。しかし、年齢が上がるにつれ、他者と比べることにより客観的に自分の能力を判断できるようになってきたり、周りから運動の出来映えを判断されたりすることで、「運動有能感」の感じ方に差が出てくる。このことから、他者との関わりが「運動有能感」の形成に影響を与えられと考えられる。一方、前述したように、「身体活動欲求」は生まれつきもっている欲求とされる。すなわち、「身体活動欲求」が強い幼児は、幼い時から積極的に身体を動かす運動遊びを行っている」と推察される。1. 1

で述べたように、幼児は遊びの中で多様な動きを身につけていくとされることから考えると、「身体活動欲求」の強い幼児はそうでない幼児に比べ、「運動有能感」が高いのではないかと推察される。すなわち、両因子間の関連が窺われる。しかしながら、幼児は成長するにつれ、自分の置かれている場や状況を判断し、それに応じて「身体活動欲求」を理性によって抑制することができるようになってくる。つまり、「身体活動欲求」と「運動有能感」との関連は窺われるものの、その関連は幼児期、中でも4・5歳児の発達年齢になるとそれほど強いものではないと推察される。

図1は、以上のことを構造図に示したものである。幼児の運動意欲には「運動有能感」と「身体活動欲求」が因子として存在し、これらの関連はそれほど強いものではないと推察される。また、どちらの因子も基盤には「受容感」があると考える。

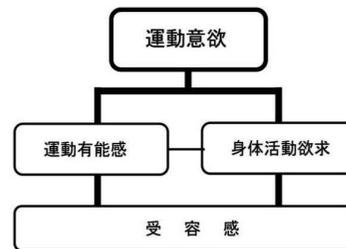


図1 運動意欲を構成する因子の構造

3 運動意欲を高める手立ての検討

3.1 受容感（安心感）を高めるには

1. 1で述べたように、幼児は「安心感」を感じると動こう、遊ぼうという意欲の喚起につながる。このことについて、岡澤（2005）は、「幼児の遊び活動を暖かく見守っていくことにより幼児の心は安定し、その安定感を基盤にしていろいろな活動に取り組んでみようという主体的な気持ちを生み出す」としている。同様に、岩崎ら（2008）も、「幼児は安定的な関係の中で、保育者から認められたり、受け止められたり、ほめられたりということが運動に対する意欲の源になる」と述べている。岡澤（2005）も岩崎ら（2008）も幼児が活動に意欲的に取り

組んでいくためには、周りの大人がほめたり認めたりしながら見守っていくという関わり、つまり周りの大人が幼児の活動や行動を受容していくこと、前項で述べた運動意欲の基盤となる因子「受容感」の重要性を指摘している。したがって、幼児の運動意欲を高めるには「受容感」を高める必要性が示唆される。このことは、図1に示したように運動意欲を構成する因子の基盤には「受容感」があることから推察されることである。

しかしながら、茂木(2003)が、「幼児自身ができたという実感があるときにこそ、褒めることが大切であり必要である」としているように、むやみにほめたり認めたりすればいいわけではない。幼児が心から「できた」「やった」という手ごたえを感じているときこそ、その幼児の気持ちを共有し、心から一緒に喜んだりほめたりすることが大事なのである。周りの大人が、幼児の気持ちを共有してあげること、つまり幼児の思いを察し、その思いを肯定的に捉え承認してあげることが重要なのであり、このような肯定的な承認が幼児にとっての「安心感」、つまり「受容感」の高まりにつながり、結果、運動意欲を高めていくのではないかと推察する。

3.2 非言語コミュニケーション・チャネルの働き

では、周りの大人は幼児の思いを察し、その思いを肯定的に捉え承認する気持ちをどのようにして伝えればよいのであろうか。

コミュニケーションは大きく分けて、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションの二つに分類される。コミュニケーションは、チャネルと呼ばれるものを通じて行われ、大坊(1998)は、言葉を介するものを「言語コミュニケーション・チャネル」、身体接触、しぐさや姿勢、視線、顔の表情、環境要因、被服・化粧、対人距離を「非言語コミュニケーション・チャネル」の主なものとして挙げている。このようなコミュニケーション・チャネルを用いることによって、私たちは様々なメッセー

ジを互いにやりとりし、相互理解を図っている。このようなコミュニケーションの働きを、大坊(1998)は「情報の提供」「相互作用の調整」「親密さの表出」「社会的コントロールの実行」「サービスや仕事上の目標の促進」という五つに分類している。大坊(1998)は「情報の提供」とは、「意図的にメッセージを相手に伝える」という基本的機能であり、表情や視線などの顔は多量の意味のある情報を伝える」と述べており、「相互作用の調整」については「相互作用の成立や展開を特徴づける行動や、相互作用を促進する」ものであるとしている。また「親密さ」とは「相手との一体性、相手への開放性の程度を反映するものであり、好意や愛情を感じ、深い関心を示すことともいえる」とし、「社会的コントロールの実行」は「地位に対応するコミュニケーションによって、他者への影響力を働かせる機能」と述べている。そして、「サービスや仕事上の目標の促進」については「職務上医者が患者の身体に触れる、などの本質的には対人的とはいえない非言語的な関与行動」だとしている。大坊(1998)の述べるこれら五つの働きの中で「情報の提供」と「親密さ」というコミュニケーションの働きが、肯定的承認を伝えるには重要な役割を果たすと考える。

また、言語コミュニケーションは、情報、知識、思考などの伝達に、非言語コミュニケーションは感情や気持ちの伝達に有効とされる(大坊, 1998; 植村, 2000; 渋谷, 2014)。さらに、言語コミュニケーションは単独で存在することはなく、常に非言語コミュニケーションが付随している。つまり、人のコミュニケーション、中でも感情や気持ちを伝える場合における非言語コミュニケーションの重要性が窺われる。

表2は、非言語コミュニケーションで使用されるチャネルに関わる先行研究(大坊, 1990, 1998, 2001, 2005a, 2005b, 2006; マジョリー, 1987; 武川, 2002; 佐藤, 2010, 2014; 大島, 2012)を基に著者らが「種類」「働き」「方法」に分類・整理したものである。表に示すように、

チャンネルはそれぞれにおいて肯定的承認に関わる感情を伝えるものがある。「視線」では、視線を向ける時間を長くしたり回数を多くしたりすることや視線を合わせることで好意や親密さ、関心をもっているという感情を伝えることができる。「対人距離」においては、体温やにおいを感じるほどの近い距離や触れ合うことができる距離でいることで親密な関係を表すことができる。「しぐさや姿勢」は、うなずくことで賛成したり支持したり承認したりしていることを伝えることができる。また、自分の体を正面から相手に向けたたり前傾したりすることで関心をもっていることを、同じ姿勢をとることで同意や好意、尊敬の意を表すことができる。さらに、頬や眼の周りや口の周りが一緒に収縮するような笑顔の「表情」は相手への好意や喜びを伝えることに有効である。そして、抱きしめたり手を握ったりするなどの「身体接触」は相手に愛情や親和を伝えることができ、軽く叩くという「身体接触」は親近感を抱いていることを伝えることができる。したがって、相手に対する肯定的承認メッセージを伝えるには、これらの非言語コミュニケーション・チャンネルが有効であり、いくつかのチャンネルを組み合わせることでより肯定的承認に関わる気持ちを強調し、効果的に伝えることができるのではないかと考える。中でも、身体接触を基盤にして組み合わせることが有効と考える。春木（2002）は「相手の皮膚の温かさや圧力、柔らかさなどの手触りを感じる身体接触により、相手の心を感じるのではないかと述べている。増山（1997）は「皮膚感覚による認知は、そのものに性質を与え、実在性を与える」としている。有田（2009）や筒井（2015）も同様に、身体接触によって感じる相手の息づかいや肌のぬくもりなどが相手の気持ちの認知に実感を与えると述べている。すなわち、人にとって、身体接触は最も手触り感のあるメッセージであり、身体接触を基盤にすることによって、他のチャンネルで伝わる肯定的承認メッセージに実感を付加することができるかと推察される。

3. 3 肯定的承認メッセージを組み込んだ運動遊びの検討

3. 3. 1 運動遊びの内容

ところで、幼児のバランスの良い身体の発育発達を考えた場合、運動遊びの内容はどのようなものがよいのであろうか。そこで、本項では先行研究をもとに運動遊びの内容を検討した。

日本発育発達学会（2014）は、幼児期は、生涯にわたる運動全般の基本的な動きを身につけやすい時期だとし、基本的な動きを「立つ」「座る」など「体のバランスをとる動き」と「歩く」「走る」など「体を移動する動き」、「持つ」「押す」などの「用具を操作する動き」の三つに分類している。

また、中村（2011）は、幼児期から小学校低・中学年の時期に身につけることが望ましいとされる基本的な動きを「たつ」「おきる」などの「体のバランスをとる動き」、「あるく」「はしる」などの「体を移動する動き」、「もつ」「おす」などの「用具を操作する動き・力試しの動き」の三つに分類している。

文部科学省（2008b）は小学校低学年で身につけるべき基本的な動きとして「体のバランスをとる運動遊び」、「体を移動する運動遊び」、「用具を操作する運動遊び」、「力試しの運動遊び」の四つを示している。「体のバランスをとる運動遊び」は、姿勢や方向を変えて「回る」「寝転ぶ」などの動きやバランスを保つ動きで構成されている。「体を移動する運動遊び」は、速さやリズム、方向などを変えて「這う」「歩く」「走る」などの動きで、「用具を操作する運動遊び」は、用具をつかんだり持ったり、用具に乗るなどの動きで構成されている。そして、「力試しの運動遊び」は、人を押ししたり引いたり、力比べをしたりする動きで構成されている。

石河ら（1989）は、幼児期にみられる基本的な動作を「安定性」「移動系」「操作系」に大別している。「安定性」は「たつ」「さかだちする」「かがむ」「おきる」などの「姿勢変化や平衡動作」としている。また、「移動系」

を「のぼる」「とびあがる」などの「上下動作」, 「はう, すべる」などの「水平動作」, 「かわす」「もぐる」などの「回転動作」に, 「操作系」を「かつぐ」「うごかす」などの「荷重動作」, 「おろす」「おりる」などの「脱荷重動作」, 「つかむ」「うける」などの「捕捉動作」, 「たたく」「くずす」などの「攻撃的動作」に細分類している。

それぞれの分類をみてみると, 日本発育発達学会や中村, 文部科学省の「体のバランスをとる動き」は姿勢を変えたりバランスをとったりする動きであり, これは石河らの「安定性」と同じ内容と考えられる。また, 日本発育発達学会及び中村, 文部科学省の「体を移動させる動き」は「走る」「歩く」など水平に移動したり, 「跳ぶ」「登る」など上下に移動したりするものであり, これらは石河らの「移動系」と同様の内容だと思われる。これら四つの先行研究の分類で異なるのは, 日本発育発達学会は「用具などを操作する動き」, 石河らは「操作系」と一つにまとめている動きを, 中村は「用具を操作する動き・力試しの動き」と二つの観点で示し, 文部科学省はさらに「用具を操作する運動遊び」と「力試しの運動遊び」の二つに分類している点である。日本発育発達学会の示す「用具などを操作する動き」は, 用具を「持つ」「運ぶ」などの動きに加え, 人を「押す」「引く」などの動きも併せて一つにまとめており, 石河らの示す「操作系」は「かつぐ」「おす」など物を操作したり荷重または抜重したりするものや人を押したり引いたりするものを一つにまとめている。中村はこれを「用具を操作する動き・力試しの動き」として分けており, 文部科学省はさらに「用具を操作する運動遊び」と「力試しの運動遊び」の二つに分類している。これは, 用具を介して行われる動きと対人で行われる動きの分類とも考えられる。すなわち, 日本発育発達学会及び中村, 文部科学省, 石河らの人の動きの分類には類似性があり, 同様のものと考えてよいであろう。

以上のことから, 本稿では, 人の基本的な動作は「体のバランスをとる動き」「体を移動

させる動き」「用具を操作する動き」「力を試す動き」に分類されると考え, 表3に示すように, 「たつ」「さかだちする」「おきる」「まわる」などの「姿勢や方向を変化させるものやバランスを保つもの」を「体のバランスをとる動き」とした。また, 「のぼる」「おりる」などの「上下に移動するもの」および「はう」「はしる」などの「水平に移動するもの」, そして「くぐる」「もぐる」などの「回転するもの」を「体を移動させる動き」とした。また, 「もつ」「ささえる」「おろす」「なげる」などの「用具を使ったり, 移動させたりするもの」を「用具を操作する動き」とした。そして, 「おす」「つかむ」「ひく」「たおす」などの「力を比べるもの」を「力を試す動き」とした。

前述したように, 幼児が, 将来にわたり様々な運動に取り組んでいくためには, 身体のバランスの良い発達が求められる。そのためには, 表3に示す「体のバランスをとる動き」「体を移動させる動き」「用具を操作する動き」「力を試す動き」のカテゴリーの中から運動遊びの内容を偏りなく選んでいくことが必要である。

表3 基本的動作の分類 (著者ら成)

カテゴリー	動作の内容	個々の動作
体のバランスをとる動き	姿勢を変化させるもの・バランスを保つもの	たつ・たちあがる・さかだちする・おきる・まわる(前後)・くむ・ぶらさがる・ころがるなど
体を移動させる動き	上下に移動するもの	のぼる・とびあがる・よじのぼる・おりる・とびこす・すべりおりるなど
	水平に移動するもの	はう・すべる・はしる・あるく・おろす・はねる・およぐなど
	回転しながら移動するもの	まわる(左右)・くぐる・もぐるなど
用具を操作する動き	用具を使ったり, 移動させたりするもの	もつ・ささえる・はこぶ・おろす・こぐ・ふる・なげる・うつ・わす・ほるなど
力を試す動き	力を比べるもの	おす・つかむ・おさえる・ひく・たおすなど

3. 3. 2 運動遊びの方法

前項で述べた運動遊び自体が肯定的承認メッセージを内包するには, どのような遊び方をしたらよいのであろうか。

石垣 (2014) は, 「キャッチボールにまだ不慣れな子どもとキャッチボールをするとき, こ

ちらが投げた緩いボールを子どもは“優しさ”として感じるかもしれない」と表現している。キャッチボールを続けようと思えば、相手の「キャッチボールをしたい」「キャッチボールを楽しみたい」という気持ちや相手の技量を認め、相手が捕りやすいように高さや速さをコントロールして投げたりしてあげることが必要だろう。このように互いが、相手の動きから気持ちや技量を感じとり、互いに気持ちよく動けるように自分の動きを相手の動きに呼応させていく、つまり、自分の「ここ」にある気持ちを相手の「そこ」に持ち出し、相手の気持ちを察するという行為は、相手の気持ちや技量を肯定的に認めているというメッセージとなり発信されると考えられる。すなわち、自分の気持ちを相手の「そこ」に持ち出し、相手の動きに自分の動きを呼応させていくことは、運動遊び自体に相手に対する肯定的承認メッセージを付加することになると考えられる。また、相手の動きと自分の動きを呼応させるという行為、つまり、互いに動きを呼応させていく、このような共同作業は、互いの心の中に相手への親近感や親和性を生成していくことにつながると考えられる。

3. 3. 3 運動遊びの効果的な実施方法の検討

運動遊びをより効果的に行うためには、どのように遊びを組み立てたらよいのであろうか。塚崎ら（2004）は、幼稚園に入園したての不安を感じている幼児には、受容的なスキンシップでその気持ちを受けとめることが必要であり、その行為が親しさを成立させていくとしている。塚崎らの指摘は、幼児を対象とした運動遊びの実施方法を考える上で示唆的である。すなわち、運動遊び実施の最初の段階では、互いに相手との親和性を高めていくことが求められるといえる。そのためには、塚崎らが指摘するように「受容的なスキンシップ」が必要と考える。また、塚崎らは、3歳児の仲間づくりを調べた結果から「受容的なスキンシップ」の具体として、抱いたり手を繋いだりするなどの身体接触の有効性を報告している。

さらに、塚崎らの幼児の行動観察では、仲間関係が築けると身体をぶつけ合うような遊びやいきなり抱きつくなどの行為がみられるようになってくることを報告している。つまり、親和性が高まったところで、徐々に動きを呼応させるような躍動感のある運動遊びを行い、親密さを高めていくことが必要となるだろう。力強い遊びや予想しない動きの遊びであっても、親密さが築けていれば、「この人なら大丈夫」「受け入れてくれる」と感じ、精一杯動いて遊ぶことができるであろう。したがって、様々な方向に速く動いたり、力強く動いたりする動きをしながら互いの動きを呼応させることで、肯定的承認非言語メッセージを伝えることができるのではないだろうか。さらに、3. 2で述べたように、肯定的承認メッセージはいろいろな非言語コミュニケーション・チャンネルで伝え合うことができる。したがって、いくつかのチャンネルを組み合わせること、例えば運動遊びに笑顔や身体接触を組み合わせることで、相手に伝わる肯定的承認非言語メッセージ性はより強まっていくと考えられる。

以上これまでに述べてきたことから、本稿では図2に示すように、幼児の受容感を高め、運動意欲を向上させる運動遊びの視点をまとめた。運動遊びは時間経過とともに、その目的を親和性を高めることから親密さを築くことへと変化させていく。基本的動作は「体のバランスをとる動き」と「体を移動させる動き」、「用具を操作する動き」、「力を試す動き」の中から偏りなく行われるようにする。非言語コミュニケーション・チャンネルは、身体接触を基盤とし、視線や対人距離、しぐさや姿勢、表情を組み合わせる。身体接触は、はじめは少ない面積で触れ合い、時間経過とともに広い面積での触れ合いにする。視線は長く何度も合わせることから、親密さの高まりと同時に短い時間で回数を少なくする。対人距離は手を伸ばせば触れ合う距離から徐々に体温やにおいが感じられる距離に近づけていく。しぐさや姿勢は、互いに向き合って遊び、徐々に相手の動きに対応して向きを変えてい

く。また、表情はほほえみを絶やさないことが必要となる。動きは互いに呼応したもので、動きの変化は一定の方向から様々な方向へ、ゆっくりから速く、そして弱い力から力強い動きへ、全体的には静的な運動遊びから動的な運動遊びへと変化させていく。このように、運動遊びの内容を図2に示す視点で考えることで、幼児に肯定的承認非言語メッセージが

伝わり、「受容感」を高め、運動意欲を向上させることができると考える。

なお、今後の課題として、作成した「肯定的承認非言語メッセージを伝える運動遊びをつくる視点」を基に具体的な運動遊びを考案し、それを4・5歳児に適用、「身体活動強度」「受容感」「運動意欲」の観点からその有効性を検討することが挙げられる。

時間の経過		→	
目的		親和性を高める	→ 親密さを築く
基本的動作	体のバランスをとる動き	←	→
	体を移動させる動き	←	→
	用具を操作する動き	←	→
	力を試す動き	←	→
非言語 コミュニケーション・チャンネル	身体接触	触れ合う部位	一部 → 全身
		触れ合う面積	少ない → 多い
	視線	長さ	長く → 短く
		回数	多く → 少なく
	対人距離	手を伸ばして触れあえる距離 → 体温やにおいを感じるほどの近い距離	
	しぐさ・姿勢	お互い向き合う → 相手の動きに対応した向き	
表情	ほほえみ、笑顔 →		
動き方	動きの呼応	ゆっくりした呼応 → すばやい呼応	
動きの質の変化	動きの方向	一定の方向 → 様々な方向	
	動きの速さ	ゆっくり → 速く	
	力の程度	弱く → 力強く	
動きの変化	静	→ 動	

図2 肯定的承認メッセージを伝える運動遊びをつくる視点

4 まとめ

本研究の目的は、先行研究をもとに幼児の運動意欲を高める運動遊びをつくる視点を考察することである。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 幼児の運動意欲は、「受容感」を基盤とし、「運動有能感」「身体活動欲求」の因子から構成される。
- 2) 幼児において、「受容感」を高めることが運動意欲の高まりに大きな影響を与えると考えられる。

3) 「受容感」を高めるには、肯定的承認非言語メッセージが有効な手段になると考えられる。

以上のことに基づき、幼児の運動意欲を高める肯定的承認非言語メッセージを組み込んだ運動遊びの視点が仮説的に作成された。

文献

- 安部恵子・上田真也・臼井達矢・三浦寛一（2010）
 幼児の体力向上プログラムに関する研究（第
 1報）、プール学院大学研究紀要、第50号、
 203-214
- 有田秀穂（2009）共感する脳、PHP新書、35-48
- 浅見俊雄・福永哲夫（2015）子どもの遊び・運動・
 スポーツ、市村出版、36-68
- ベネッセ教育総合研究所（2015）第5回幼児
 の生活アンケート－乳幼児をもつ保護者を
 対象に－
- 智原江美（2011）幼児期の発育発達からみた
 運動遊びの考え方、京都光華女子大学短期
 大学部研究紀要49、7-17
- 大坊郁夫（1990）対人関係における親密さの
 表現－コミュニケーションに見る発展と崩
 壊－、心理学評論 Vol.33, No.3, 322-352
- 大坊郁夫（1998）しぐさのコミュニケーション・
 人は親しみをどう伝えあうか、サイエンス
 社、5-155
- 大坊郁夫（2001）対人コミュニケーションの
 社会性、対人社会心理学研究1、1-16
- 大坊郁夫（2005a）コミュニケーションと記号
 としての身体、対人社会心理学研究（5）、
 1-5
- 大坊郁夫（2005b）社会的場面における人間の
 非言語的な行動と親和性の向上、バイオメ
 カニズム学会誌、Vol.29, No.3, 118-123
- 大坊郁夫（2006）コミュニケーション・スキ
 ルの重要性、日本労働研究雑誌、13-22
- 春木豊（2002）身体心理学、川村書店、242-254
- 初塚真喜子（2010）アタッチメント（愛着）理
 論から考える保育所保育のあり方、相愛大学
 人間発達学研究3、1-16
- 濱島隆幸・杉原隆・岩崎洋子・猪俣春世・中
 村和彦・吉田伊津美・杉本信・鈴木康弘（1993）
 幼児の有能感の発達と園での行動及び幼児
 に対するイメージとの関係、日本体育学会
 大会号、44A、219
- 発育発達学会（2014）幼児期運動指針実践ガ
 イド、杏林書院、1-14
- 広岡義之（2013）新しい保育・幼児教育方法、
 ミネルヴァ書房、117-120
- 広瀬牧子（2005）幼児期の遊び体験－勉強する
 意欲の土台に、児童心理、59（8）、753-756
- 石垣健二（2014）「身体的経験」および「身体
 的対話」の領域：「間身体性の教育」として
 の学校体育再考、体育学研究59、483-495
- 石河利寛・栗本闊夫・勝部篤美・近藤充夫・
 前川峯雄・松田岩男・森下はるみ・清水達雄・
 末利博・高田典衛（1980）幼稚園における
 体育カリキュラムの作成に関する研究(特)．カ
 リキュラムの基本的な考え方と予備的調査
 の結果について、体育科学8、150-155
- 岩崎洋子・猪俣春世・石川葉子・小池清美（1989）
 幼児の運動意欲に関する研究（特）、鶴見大
 学紀要第26号、33-40
- 岩崎洋子・吉田伊津美・朴淳香・鈴木康弘（2008）
 保育と幼児期の運動あそび、萌文書林、61-73
- 厚生労働省（2007）第6回21世紀出生児縦断
 調査結果の概況
- 小山高正・田中みどり・福田きよみ（2014）
 遊びの保育発達学、川島書店、111-128
- 鯨岡峻・鯨岡和子（2001）保育を支える発達
 心理学 関係発達保育論入門、ミネルヴァ
 書房、135-164
- Kurt Meinel（1981）マイネル・スポーツ運動学、
 大修館書店、299-314
- マジヨリー・F・ヴァーガス（1987）非言語
 コミュニケーション、新潮選書、15-17
- 水野康・嶋崎博嗣・吉羽一弘・宮丸凱史・森
 昭三（1996）幼児の運動遊び欲求に関する
 研究～その1. Pedmeterにより測定した園
 内活動量との関連～、日本体育学会大会号
 47、414
- 茂木俊彦（2003）受容と指導の保育論、ひと
 なる書房、27-96
- 増山英太郎（1997）感性の科学—慣性情報処
 理へのアプローチ—、サイエンス社、52-56
- 文部科学省（2008a）幼稚園教育要領解説、フ
 レーベル館、30-89
- 文部科学省（2008b）小学校指導要領解説体育
 編、東洋館出版社、24-26

- 文部科学省 (2013) 幼児期運動指針ガイドブック, サンライフ企画, 5-16
- 森司朗・中本浩揮・桐谷昌代 (2006) 運動の重要度と親の運動へのかかわりが幼児の運動有能感の発達に与える影響, 鹿屋体育大学学術研究紀要, 34, 31-39
- 森司朗・杉原隆・岩崎洋子・猪俣春世・中村和彦・吉田伊津美 (1996) 幼児の運動に関する有能感尺度の作成, 日本体育学会大会号 47, 205
- 森司朗・杉原隆・吉田伊津美・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮 (2011) 幼児の運動能力における時代推移と発達促進のための実践的介入, 平成 20-22 年度文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 B) 研究報告書
- 永島啓雄・猪俣公宏 (1986) 児童前期における運動意欲の特性に関する研究-その 1, 日本体育学会大会号, 168
- 中村和彦 (2004) いま子どもたちの遊びは, 児童心理, 58 (8), 754-757
- 中村和彦 (2011) 子どもが夢中になる! 楽しい運動遊び, 学研, 14-95
- 西田明史 (2012) 体育的遊びを通して獲得される幼児の運動技能, 永原学園西九州大学短期大学部紀要, 21-27
- 野田美樹 (2010) 運動する意欲を育てる保育の研究-幼児の心が動く場面を手がかりに-, 国際研究論叢 22 (3), 41-53
- 小田幹雄・長澤靖夫 (2007) 運動会における幼稚園児の受容感の認知がその後の運動場面に与える影響について, 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集, Vol.8, 91-98
- 大島朗生 (2012) 表情, 姿勢, 動作から相手の気持ちを読み取る, 児童心理 66 (15), 18-24
- 岡澤哲子 (1996) 幼稚園の運動遊び場面における有能感テストの作成, スポーツ教育学研究, Vol.16, No.1, 63-72
- 岡澤哲子 (2004) 保育者の言葉がけが幼児の遊び行動におよぼす影響について-有能感を高める試みを通して-, 名古屋学芸短期大学部研究紀要 創刊号, 133-140
- 岡澤哲子 (2005) 幼児の運動遊びでの有能感形成におよぼす保育者の言語活動の影響について, 人間文化研究科年報 20, 229-243
- 岡澤祥訓 (1998) なぜ, 有能感なのか, 体育科教育 46 (6), 70-72
- 岡澤祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎 (1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究, スポーツ教育学研究, Vol.16, No.2, 145-155
- 坂原明 (2006) 改訂板保育のための教育心理学, プレーン出版, 71
- 酒井俊郎 (2007) 幼児期の体力づくり, 体育の科学, Vol.57, No.6, 417-421
- 桜井茂男・杉原一昭 (1985) 幼児の有能感と社会的受容感の測定, 教育心理学研究第 33 巻, 第 3 号, 53-58
- 佐々木玲子 (2005) 子どもの動作発達, 子どもと発育発達, Vol.3, No.1, 巻頭言
- 佐々木玲子 (2014) 乳幼児の動作獲得と習熟, 子どもと発育発達, Vol.11, No.4, 213-217
- 佐藤綾子 (2010) 読顔力, P H P 文庫, 18-186
- 佐藤綾子 (2014) 非言語表現の威力 パフォーマンス学実践講義, 講談社現代新書, 85-121
- 仙田満 (2009) 環境デザイン論, 日本放送出版協会, 118-141
- 渋谷昌三 (2014) 知識 (情報)・思考の伝達, 児童心理, 金子書房, 1-10
- 杉原隆・河邊貴子 (2014) 幼児における運動発達と運動遊びの指導, ミネルヴァ書房, 31-167
- 杉原隆・吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮・近藤充夫 (2004) 幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に関する環境要因の構造的分析, 平成 14 - 15 年度文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 B) 研究報告書
- 鈴木康弘・中村和彦・杉原隆・岩崎洋子・猪俣春世・吉田伊津美 (1996) 幼児の運動の有能感と園での自由遊び場面における行動との関係, 東京学芸大学紀要. 第 5 部門, 芸術・健康・スポーツ科学, 48, 111-119

高城義太郎 (1977) 子どもの遊び・その指導理論, 推せんのことば, 小林芳文著, 光生館, 1-2

武川直樹 (2002) コミュニケーションにおける視線の役割－視線が伝える意図・気持ち－, 電子情報通信学会誌 Vol.85, No.10, 756-760

塚崎京子・無藤隆 (2004) 保育者と子どものスキンシップと両者の人間関係との関連－3歳児クラスの観察から－, 保育学研究 42 (1), 42-50

筒井茂喜・佐々敬政・日高正博・後藤幸弘 (2015) 身体接触を伴う運動「カバディ」の教育的効果－小学校2・3・4年生児童を対象として－, 兵庫教育大学研究紀要第47巻, 75-84

植村勝彦・松本青也・藤井正志 (2000) コミュニケーション学入門 心理・言語・ビジネス, ナカニシヤ出版, 64-77

(受付日 2018/02/20 受理日 2018/03/30)

資料1 運動意欲に関する先行研究 (一部)

著者名	発表・ 発刊年	主 張
浅見俊雄・福永哲夫	2015	運動有能感は、運動の上達や成功を経験することで有能感を形成し、結果として自信を持ち積極的に行動する傾向を引き出すものである
猪俣春世・岩崎洋子・猪俣公宏	1988～ 1989	幼児の運動意欲は、生理的な身体活動欲求により多く依存している
猪俣春世・岩崎洋子・猪俣公宏	1990～ 1992	有能感が身体活動欲求とともに幼児期の運動意欲の重要な基盤である
猪俣春世	1997	幼児の運動意欲は、運動有能感と身体活動欲求で構成されている
岩崎洋子・猪俣春世・石川葉子・小池清美	1989	幼児の運動意欲は生理的な身体活動欲求により多く依存している
岩崎洋子・杉原隆・猪俣春世・中村和彦・吉田伊津美・濱島隆幸・杉本信・鈴木康弘	1992	運動有能感と運動能力には相関がある。また、大人からの受容感と運動能力にも相関がある
岩崎洋子・猪俣春世・橋本葉子・馬場清美	1992～ 1997	有能感が身体活動欲求とともに幼児期の運動意欲の重要な基盤である
岩崎洋子・猪俣春世・橋本葉子・馬場清美	1994	有能感が身体活動欲求とともに幼児の運動意欲の重要な基盤である。また、大人・仲間より受容されることにより有能感を高めていく
岩崎洋子・猪俣春世・吉田伊津美	1998～ 2001	運動有能感が身体活動欲求とともに幼児期の運動意欲の重要な基盤である
岩崎洋子・猪俣春世・吉田伊津美	2002	運動有能感は行動に影響を与える
岩崎洋子・朴淳香	2005	5歳児では、男女児ともに、運動技能・運動能力・運動有能感・身体活動欲求全てに相関がある
及川直樹	2006	幼児の運動有能感是他児との比較などによる客観的な基準ではなく、主観的な基準である
大久保英哲・岩崎裕香	2007	保育者の言葉がけにより有能感・受容感には有意に高まらなかった
岡澤哲子	1994	運動の有能感の認知には性度の認知が関係している
岡沢哲子	1996	運動の有能感には有能感と受容感から構成されている
岡沢哲子・福田美穂子	1996	保育者の言語活動が幼児の運動遊び場面での有能感(有能感と受容感)を高める
岡沢哲子・古川奈都子	1998	有能感(受容感も含む)の変化によって幼児の遊びの選択が変容することを示唆している
岡沢哲子・谷口典子	2000	幼児の運動場面における有能感は、運動の受容感因子と運動の有能感因子の2因子で構成されている
小田幹雄・長澤靖夫	2007	幼児期においては受容感を高めることが運動有能感を育て、運動に自発的に関わり出す態度を養うことにつながる
桜井茂男・杉原一昭	1985	幼児の自己知覚は有能感と社会的受容感により測定できる
嶋崎博・水野康・吉羽一弘・森昭三・宮丸凱史	1996	運動遊びという行為を引き起こす内面的側面を運動遊び欲求とした
杉原隆	1985	運動遊びについての有能さの認知の高い者は低い者より積極的に自身をもち自律心が強い
杉原隆・岩崎洋子・猪俣春世・中村和彦・吉田伊津美・濱島隆幸・杉本信・鈴木康弘	1992	運動有能感は行動や運動の積極性、協調性と正の相関を示す
杉原隆	2000、 2014	重要な他者に受け入れられた子は、運動有能感を形成し、行動が積極的・活動的になるとともに、運動好きになる
鈴木康弘・中村和彦・杉原隆・岩崎洋子・猪俣春世・吉田伊津美	1996	運動の有能感の高い幼児は低い幼児に比べて活動的である
日本発育発達学会	2014	重要な他者に受け入れられた子は、運動有能感を形成し、行動が積極的・活動的になるとともに、運動好きになる
濱島隆幸・杉原隆・岩崎洋子・猪俣春世・中村和彦・吉田伊津美・杉本信・鈴木康弘	1993	遊びで自分は有能であると認知することにより、運動場面での行動が積極的になる。受容感は幼児が健康的であるために重要な要因である
森司朗・杉原隆・岩崎洋子・猪俣春世・中村和彦・吉田伊津美	1996	運動有能感と行動や性格との相関がみられる
森司朗・杉原隆・岩崎洋子・猪俣春世・中村和彦・吉田伊津美	1997	子どもの主体性、自発性を促す運動遊びは、子どもの運動有能感を高める
森司朗	2003	運動に関する有能感を自己認知することで、運動が好きになっていく
吉田伊津美・杉原隆	2000、 2002	運動遊び傾向が強い子は、運動有能感が高く、運動遊びに積極的に取り組む
吉田伊津美	2008	子どもは運動遊びの中で達成経験、成功経験を積むことで、やればできるという運動有能感を形成する
吉田伊津美	2009	重要な他者に受け入れられた子は、運動有能感を形成し、行動が積極的・活動的になるとともに、運動好きになる